

MAMA'S LAST HUG ママ、最後の抱擁

Animal Emotions and What They Tell Us about Ourselves

わたしたちに動物の情動がわかるのか

FRANS DE WAAL フランスドゥ・ヴァール 柴田裕之 訳



死を悼み、不公平をきらい、 喜びをわかちあう

紀伊國屋書店

情動はけっして人間だけのものではない。科学界が目を背け続けてきたテーマを、霊長類の社会的知能研究の第一人者が語る。

前作『動物の賢さがわかるほど人間は賢いのか』の姉妹篇となる最新作。

22か国で刊行、ニューヨークタイムズ・ベストセラー!

MAMA'S LAST HUG

ママ、最後の抱擁

Animal Emotions and What They Tell Us about Ourselves

わたしたちに動物の情動がわかるのか

MAMA'S LAST HUG by Frans de Waal
Copyright © 2019 by Frans de Waal

Japanese translation rights arranged with Frans de Waal
c/o Tessler Literary Agency LLC, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

私の心に火を灯してくれる、
カトリックスに捧げる

プロローグ

007

第1章

ママの最後の抱擁

類人猿のアルファメスの暇乞い

021

自分自身の姿を認める／ママの中心的な役割／アルファメス／死の最終性と嘆き

第2章

心を覗く窓

霊長類が笑ったり微笑んだりするとき

066

自己を表現せよ／満面の笑み／それは面白い！／混ざり合った情動

第3章

体から体へ

共感と同情

107

積年の叡智／サル真似／痛む箇所につけをする／善と悪／ラットの同情

第4章

私たちを人間たらしめている情動

嫌悪、羞恥、後ろめたさ、その他の不快さ

喉が渴いた馬／目には目を／自負と偏見／犬のように後ろめたそうに／

オエツとなる要因／情動は臓器のようなもの

163

第5章 権力への意志 政治、謀殺、争い

アルファオスのように／政治家の癪癢／謀殺／闘いの太鼓／メスの力

228

第6章 情動的知能 公平さと自由意志について

心の讃歌／キュウリとブドウをサルに与えると／最後通牒ゲーム
自由意志とB.S.／私の味方になってくれ

269

第7章 感覚性 動物が感じるもの

食肉とセンシエンス／クリュシッポスの犬／進化に奇跡はいらない
魚は悲鳴を上げなくても／透明性

315

第8章 結論

362

謝辞／訳者あとがき／参考文献／原注／索引

「」は著者、（）は訳者による注を示す。邦訳のない書名は原題を（）に記す。

カバー写真および一部を除く口絵写真は著者の撮影による。
また、本文中のイラストはすべて著者による。

プロローグ

行動観察は、私にとってごく自然なことだ。あまりにたやすいので、やり過ぎる嫌いがある。ようやくそれを悟ったのは、ある日帰宅して、地元のバスで見かけた光景を母に話したときだ。小学校も最終学年の頃だったと思う。年上の男の子と女の子が、気持ち悪いキスをしていた。まったく気が知れなかったが、ティーンエイジャーならやりがちなことで、二人は口を開け、ぬめぬめした唇をべたべたと押しつけ合っていた。それ自体はどういうことはなかったけれど、それから気がついた。キスのあと、女の子がガムを噛んでいた。キスの前に見たとき、ガムを噛んでいたのは男の子だけだったのに。あれっ、と首をひねったが、それから思い当たった。ガムを口移しにしたのだろう。ところがその話をして、母は少しも面白がらず、困った顔をして言うのだった。人さまのことをそんなにじろじろ眺めるのはやめになさい、あまりお行儀の良いことではありませんからね、と。

観察は、今では私の仕事になった。だが、女性が何色の服を着ているかや、男性がかつらを着けて

いるかどうかに気づくなどとは思わないでほしい。その手のことにはからきし興味がないので。その代わりに的を絞っているのが、情動表現やボディランゲージや社会的ダイナミクスだ。これらは人間と他の霊長類とでとてもよく似ているから、私の観察力はどちらにも同じように使える。もつとも、研究の対象としているのはおもに後者だが。学生時代は、動物園で飼育しているチンパンジーのコーナー〔飼育環境下の集団〕を見下ろす場所に研究室があつたし、ジョージア州アトランタ近くのヤークス国立霊長類研究センターの研究者としても、過去二五年にわたって同じような環境に身を置いてきた。このフィールド・ステーションのチンパンジーたちは、日中は屋外で過ごしており、ときどき大騒ぎをし、それがひどくやかましいので、私たちは窓に駆け寄ってその光景に見入る。たいていの人には、二〇頭ばかりの毛むくじゃらの獣が叫んだり金切り声を上げたりしながら走り回る、めちゃくちゃな混乱状態に見えるだろうが、じつはそこにはとても秩序立った社会が存在している。私たちは顔を見れば、いや、声を聞いただけでも、どれがどのチンパンジーか区別できるし、彼らは何をしそうか予想がつく。パターンを認識できなければ、観察は焦点が定まらず、行き当たりばつたりになつてしまう。一度もやったことがなく、ろくに知らないスポーツを観戦するようなものだ。ようするに、何も見えてこない。だからこそ、ここアメリカではサッカーの国際試合のテレビ中継は観るに堪えないのだ。ほとんどのスポーツナレーターは中途からサッカーを担当するようになったので、基本的な戦略がつかめない。ボールしか見ておらず、決定的な場面でもくだらないことをべらべらしゃべり続ける。パターン認識ができないと、そういうことになるのだ。

カギは、中心的な場面以外にも目配りすることだ。たとえば、オスのチンパンジーが石を投げたり



オスのチンパンジーたちは喧嘩のあとの仲直りのとき、ライバルの尻を熱心にグルーミングしたがる。両者が同時にそうしようとしたら、珍妙な「シックスナイン」の姿勢になりかねない。

脇を突進していったりして別のオスを畏縮させていたなら、わざとその二頭から目を逸らし、周辺を調べる必要がある。そこで新たな展開が見られるからだ。私はこれを「ホリスティック全体的観察」と呼んでいる。状況全体に注意を払うということだ。威嚇されたオスの大の仲良しが隅のほうで眠っていても、それを無視していいわけではない。彼が目覚めて二頭に向かっていった途端、まもなく流れが変わることをコロニーの誰もが察する。メスが大声を上げて新たな動きを知らせ、母親たちは赤ん坊をぎゅっと抱き締める。

騒ぎが収まったあとも、あっさり背を向けたりはしていない。この一件の主役たちから目を離さずにいるに限る——まだ幕は下りていないから。これまで私はチンパンジーの仲直りを何千回も目にしてきたが、最初の頃の一回には仰天した。つい先ほどまで争っていた二頭のオスが直立して全身の毛を逆立て、歩み寄ったのだ。その体は、いつもの倍も大きく見えた。二頭は凄まじい目付きで睨み合ったので、私はまた喧嘩が始まるものとはかき思った。だが、そばまで来ると、一頭が突然くるりと向きを変え、尻を突き出した。すると、もう一頭は相手の肛門の周りを念入りにグルーミング（毛づくろい）し始めた。大きな音を立てて唇や歯を打ち合わせ、この作業にどれほど熱中しているかを示す。一頭目も

同じことをしたかったので、珍妙な「シックスナイン」の姿勢に落ち着き、二頭とも同時に相手の尻をグルーミングできた。ほどなく二頭はリラックスして向き直ると、顔をグルーミングし合った。こうして平穏が戻った。

最初にグルーミングした箇所は異様に見えるかもしれないが、思い出してほしい。英語には brown-nosing (「相手の尻にキスして排泄物で」鼻を茶色くする) や ass-licking (「相手の」尻を舐める) といった表現(「いずれも、おべっかを使うことを意味する」)がある(他の多くの言語も似たようなものだ)。これにはしっかりと根拠があることは請け合いだ。人間は、強烈な恐れを覚えると吐いたり下痢をしたりする場合がある。英語ではおびえることを crap one's pants (パンツに脱糞する) と言う。パンツを抜きにすれば、これは類人猿でもよくあることだ。体の出口は重大な情報を漏らすものなのだ。オスのチンパンジーどうしの小競り合いが終わったずっとあとに、一方がぶらつきながら、競争相手が草むらで座っていたまさにその場所にさりげなく近づいたかと思うと、やにわに身を屈めて匂いを嗅ぐ姿が見られるかもしれない。チンパンジーは人間と同じで視覚をおおいに頼りにしているものの、嗅覚も相変わらず重要だ。隠し撮りからわかったのだが、人間も握手をしたあと、相手が同性のときにはとくに、手の匂いを嗅ぐことが多い。何気なく手を上げて顔に近づけ、化学物質のかすかな香りを嗅いで、相手の気質を知ろうとする。それは無意識の動作で、私たちはこれに限らず、他の霊長類の行動に似たことをたくさんする。それなのに、自分たちは合理的な行為者であり、万事心得て行動していると思いたがる一方で、他の種は自動機械として片づけてしまう。だが本当は、それほど単純ではない。

私たちは絶えず自分の感情に触れているとはいえ、情動と感情は別物だから厄介だ。私たちは情動

と感情をいっしょくたにしがちだが、感情は内面の主観的狀態であり、厳密に言えば本人にしか知りようがない。私には自分の感情はわかるが、あなたの感情はわからない——あなたがそれについて語ってくれたことを除いては。私たちは自分の感情について、言葉で伝え合う。一方、怒りや恐れから性的欲望や愛情、権力欲に至るまで、情動は身体的・心的狀態であり、行動を促す。情動は特定の刺激で引き起こされ、行動面の変化を伴うので、表情や肌の色、声音、仕草、体臭などによって、外側からでも感知できる。こうした変化を経験している人がその変化を自覚したときにだけ、それは感情になる。感情は意識的な経験なのだ。だから私たちは、情動は示すが、感情については語る。

仲直り、すなわち衝突に続く友好的な和解について考えてみよう。仲直りは測定可能な情動的相互作用だ。それを検知するには、敵対していた者どうしの間で何が起こるかを観察する根気さえあればいい。だが、悔恨や寛容や安堵といった、仲直りに伴う感情は、それを経験している本人にしか知りえない。あなたは他者も自分と同じ感情を抱いているのではないかと思うこともあるだろうが、相手が同じ種の仲間だったとしてさえ、確信は持てない。たとえば誰かが、別の人を赦した^{ゆる}、と言うかも知れないが、その言葉を信じられるだろうか？ 人は口とは裏腹に、機会があり次第、赦したはずの言動を蒸し返すことがまある。私たちは自分の内面の状態を十分に知らず、自分自身と周りの人の両方に判断を誤らせることが多い。私たちは、偽りの幸せに浸り、恐れを抑え込み、見当違いの愛情を注ぐ達人なのだ。だから私は、言葉を使わない生き物相手の仕事に気が入っている。彼らの感情は推測するしかないが、少なくとも彼らは、自分について心にもないことを語って私をあらぬ方向に導いたりけっしてしない。

人間の心理を研究するときには、たいいてい質問紙に頼るが、そうした質問紙は自己申告した感情を重視する一方、実際の行動は軽んじる。だが私は、その逆を良しとする。私たちは、人間どうしが接する場面をもっと観察する必要がある。わかりやすい例として、イタリアでの大規模な学会の話を紹介しよう。何年も前、私は駆け出しの研究者としてその会合に出席した。霊長類がどのように争いを解決するのかについて話すためにその場にいたが、人間による申し分ない例が示されるところを目にしようとは思ってもいなかった。とある科学者が、傍若無人の振る舞いをしていた。あんな行動は見たことがなかったし、その後もめったにお目にかかったためしがない。彼は著名で、しかも英語を母語としていたからに違いない。国際会議では、アメリカ人とイギリス人は母国語で話せるという並外れた特権を享受できるように、自分は知的に優れているのだと勘違いすることがよくある。ブロークンイングリッシュで彼らに異を唱える人はいないので、その誤った考え方が正されることはまずない。プログラムは講演が目白押しで、一つ終わるごとに、英語を母語とする例の大先生が最前列の席から飛び出ていつて、ご丁寧にも、その講演を私たち聴衆が理解するのを助けにかかる。たとえば、あるイタリア人女性が研究を発表し終え、まだ拍手が続いているのに、大先生は席を立って演壇に上がり、講演者からマイクを奪うと、文字どおりこう言った。「この人が本当に言いたかったのは……」テーマが何だったかはもう覚えていないが、そのイタリア人講演者は顔をしかめた。大先生の尊大さと講演者への無礼な態度は見逃しようもなかった。近頃なら、これは「マンスブレイニング」〔男性が女性に偉そうに説明すること〕とでも言うことだろう。

聴衆の大半は同時通訳で聴いていた。実際、通訳する時間差があったおかげで、聴衆は大先生の行

動の裏にある傲慢^{ごうまん}さを見透かしやすかったのかもしれない。テレビ中継されている討論で音を消したほうが、ボデイランゲージを読み解きやすくなるのと同じだ。聴衆は怒りと軽蔑の声を上げ始めた。

大先生の顔に浮かんだ驚きの表情から、自分の出過ぎた行動がどう受け止められているのか、完全に判断を誤っていたことが窺^{うかが}えた。そのときまでは、万事問題なく運んでいるとばかり思い込んでいたのだ。彼はうろたえ、穴があつたら入りたい気持ちになったのだろうか、そそくさと演壇を降りた。

彼とイタリア人講演者が席に戻ってから、私は目を離さなかった。一五分としないうちに、大先生はその講演者に近づき、通訳を聞くために使っていたヘッドセットを差し出した。相手が持つていなかったからだ。彼女は礼儀正しくそれを受け取った（本当は、必要なかったかもしれない）。それは暗黙の和解の申し出と受け容れと見なせる。「暗黙の」というのは、二人が先ほどの気まずい瞬間に触れる様子がまったくなかったからだ。人間は衝突のあと、微笑みや褒め言葉で善意を示し、それで一件落着とすることが多い。二人が何を話しているのかは聞き取れなかったが、聞くところによると、講演がすべて終わったあと、大先生はもう一度その講演者に歩み寄り、「なんとも馬鹿な真似^{まね}をしてしまいました」とはつきり言ったという。このあつばれな自己認識は、明白な仲直りの申し出に近かった。人間による争い事の解決はいたるところで見られるし、あの学会ではそれが目を見張るようなかたちで行なわれたものの、私自身の講演に対する反応は今一つだった。私は研究を始めたばかりだったし、科学界はまだ人間以外の種が仲直りをするという考え方を受け容れる段階になかった。私の観察結果を疑う人は一人もいなかったと思う。裏付けとなるデータと写真を山ほど提供したから。ただみんな、その観察結果をどう受け止めればいいのか、見当もつかなかったのだ。当時、動物の争いに関

する理論は、もっぱら勝ち負けに的を絞っていた。勝つのは善、負けるのは悪で、肝心なのは誰が資源を手に入れるか、だった。一九七〇年代の科学界では、動物はホップズの描いた自然状態の人間の様な存在、つまり暴力的で競争を好み、利己的で真の思いやりなどけつして持たない生き物だと考えられていた。だから、仲直りを重視する私はとうてい理解してもらえなかった。そのうえ、「仲直り」という言葉には情動が絡んでいるように聞こえたらしい。そして、情動的なものは評判が良くなかった。研究者のなかには、こちらを見下すような態度をとり、君は科学にはお呼びでないロマンティックな考え方に惚れ込んでしまったのだと、私に言って聞かせる人もいた。私はまだ青二才だったから、彼らは説教を垂れた。自然界では万事が生存と繁殖を中心に回っており、仲直りをする生き物など先が見えている、妥協は弱者がすることだ、と。たとえチンパンジーがそのような行動を見せたとしても、実際にそれが必要なかどうかは怪しいと彼らは言った。それに、他のどんな種も、仲直りなど間違ってもしたためしがない、と。私は偶然の出来事を研究しているにすぎないというわけだ。

それから数十年の月日が流れ、何百もの研究が積み重なった今、じつは仲直りはどこでも見られるありふれた行動であることが知られている。ラットやイルカからオオカミやゾウまで、社会的哺乳動物のすべてで、そしてまた鳥類でも見られる。この行動は関係修復を助ける。実際、あまりに効果的なので、今日、もし喧嘩のあとに仲直りしない、社会的哺乳動物が見つかったら、誰もが驚くはずだ。どうやって社会のまとまりを保っているのかと、不思議に思うだろう。だが当時、私はそんなことは知らなかったから、先輩方のご親切な助言をいちいち拝聴した。もともと、それで気が変わることはなかった。私にしてみれば、観察はどんな理論にも優るからだ。実生活で動物がすることは、動物は

このように振る舞うはずであるという先入観につねに優先する。生まれながらの観察者なら、自ずとそう考える。すなわち、科学に対して帰納的に取り組むのだ。

同様に、他の霊長類が、情動に満ちた状況で人間のものに似た表情を浮かべるのを観察したなら（チャールズ・ダーウィンが『人及び動物の表情について』でそうした観察を行なったことは有名だ、彼らと人間の内面生活の類似性を見過ぐすわけにはいかない。彼らは歯を見せてにつこり笑うし、くすぐられるとしゃがれ声でくすぐす笑うし、苛立つと唇を尖らせる。これが自動的に理論の出発点となる。動物の情動について、あるいはその欠如について、どんな見方をしようと勝手だが、人間と他の霊長類が顔面の同じ筋組織を通して反応を示したり意図を伝えたりするのが理にかな適うような枠組みを、どうしても思いつかなければならぬ。ダーウィンは、人間と他の種の情動的連続性を想定することで、自然にそれをやつてのけた。

それでも、情動を表現する行動と、情動の意識的経験あるいは無意識的経験との間には、途方もない違いがある。動物が何を感じているのかがわかると主張する人は誰であれ、科学的ではない。それはあくまで推量にすぎない。もつとも、その推量は必ずしも悪いわけではないし、人間と関連する種が関連した感情を持っていると想定することには私も大賛成だが、確証があるわけではない点は見落とすべきではない。本書の題の『ママ、最後の抱擁^{ハグ}』は、ママという名の年老いたチンパンジーが死の二週間ほど前に年老いた教授と交わした抱擁^{ハグ}だと言うときにさえ、私は自分の記述に彼女の感情を含めるわけにはいかない。ハグというお馴染みの行動は、感動的な背景と相まって、ママの感情をたしかに示唆しているとはいえ、その感情には依然としてアクセスできない。この不確実性のせいで、

情動を研究する者は昔から頭を悩ませてきたのだし、この分野は曖昧で厄介だと思われることが多い。

科学は不明確なものを好まない。だから、動物の情動のこととなると、科学の立場は世間の見方としばしば食い違う。動物には心の動きがあるかと道行く人に訊けば、「もちろん」という答えが返ってくるに決まっている。みな自分のペットの犬や猫にはありとあらゆる心の動きがあるのを知っており、それを踏まえて他の動物にも情動があると思っ**て**いる。だが大学で教授たちに同じ質問を投げかけると、その多くが頭を搔き、困った顔をして、いったいどういう意味なのかと尋ねるだろう。そもそも、情動をどう定義するのか？ 彼らは、B・F・スキナーに倣って情動を退けるかもしれない。スキナーは、動物を機械と見なすことを奨励したアメリカの行動主義者で、情動を「私たちが俗に、それが行動を引き起こすと考える架空の原因の絶好の例」¹として切り捨てた。たしかに、今時動物の情動を頭から否定する科学者はめったにいないが、情動について語るのに抵抗を覚える人は多い。

動物の生活に情動があるのを疑っている人に侮辱されたと、動物になり代わって感じる読者がいたら、心に留めておいてもraithたい。科学に特有の精査がなかったら、私たちは、地球は平らだとか、蛆虫は腐りかけた肉から自然に湧いてくるとかいったことを、今なお信じていただろう。科学は、一般的な先入観に疑問を投げかけるときに真価を発揮する。だから私は、動物の情動に対する懐疑的な見方には同意しないといえ、動物の情動の存在を単に肯定するだけでは、空は青いと言うようなものだとも思う。それではろくに先へは進めない。私たちはもっと知る必要がある。それはどんな情動なのか？ どのように感じられるのか？ 何の役に立つのか？ 魚がおそらく感じるだろう恐れは、馬が感じる恐れと同じなのか？ そうした疑問に答えるには、印象だけでは不十分だ。私たちが自分

自身の種の内面を調べる方法を見てみよう。研究対象とする人間を部屋に入れ、心搏数や電気皮膚反応や顔面の筋収縮などを測定する装置につなぎ、動画を観てもらったりゲームをしてもらったりする。脳もスキャンする。人間以外の種も、同じように念入りに調べる必要がある。

私は野生の霊長類について回るのが大好きで、長年の間に地の果てまで出かけ、じつに多くのフィールド研究の現場を訪ねてきたが、私であろうと他の誰であろうと、現場での観察から学ぶことは限度がある。これまで目撃したうちでも、とりわけ情動に満ちあふれた瞬間を一つ挙げよう。私のほるか頭上にいた野生のチンパンジーたちが突然、血も凍るような叫び声を上げ始めた。チンパンジーは、この世で指折りの騒々しい動物だ。だから、叫びを耳にした私は一瞬心臓が止まる思いだった。いったい何の騒ぎか？　じつは、チンパンジーたちは不運なサルを捕まえたところで、どれほどその肉を貴重に思っているかは疑いようがなかった。サルの死骸の持ち主に群がってご馳走を楽しむチンパンジーたちを見守りながら、私は考えた。持ち主が肉を仲間に分け与えるのは、自分だけでは食べきれないからで、別段、何とも思っていないのか、それとも、彼が肉を一片口に運ぶごとに、それに恐る恐る触れながら哀れっぽい声を上げる物乞いたちを全部追いつまいたいからなのか？　はたまた、彼は仲間たちがどれほどお裾分けに与りたがっているのかを承知しているので、ひよつとして利他主義から分け与えているのだろうか？　観察しているだけでは、けっして確かなことは言えない。肉の持ち主の腹の空き具合を変えたり、あるいは、他のチンパンジーが乞い求めにくくしたりする必要はある。それでもなお、彼は気前良く分け与えるだろうか？　彼の行動の背後にある動機を突き止めるには、制御された実験をするしかないのだ。

これは知能の研究ではすこぶるうまくいった。今日私たちは動物の精神生活メンタルライフについて堂々と口にするが、それは記号によるコミュニケーションや自己鏡映像認知、道具の使用、将来に向けての計画立案、他者の視点の採用などについて、一世紀にわたって実験を積み重ねてきたからこそだ。こうした研究によって、人間を動物界の残りから隔てているとされる壁に大きな風穴がいくつも開いた。情動についても同じ展開になることが期待できるが、それは体系的な取り組み方を導入した場合に限られる。理想的には、研究室とフィールドの両方の成果を使い、それを同じパズルの異なるピースとして組み合わせるといいだろう。

情動は捉え所がないかもしれないが、私たちの生活の中で際立った一面でもある。情動はあらゆるものに意味を与える。実験をすると、人は心を揺さぶるような写真や話を、当たり障りのないものよりもずっとよく記憶する。また、これまでにしたことやこれからしようとしていることのほぼすべてを、情緒的な言葉で表現したがる。結婚式はロマンティックだったりお祭り気分だったりするし、葬儀には涙の雨が降るし、スポーツの試合では結果次第でおいに楽しい思いもすれば落胆を味わったりもする。

動物に関しても、私たちの情動にはバイアスがある。インターネット上で、野生のオマキザルが石を使って木の実を割っている動画は、水牛の群れが子供の水牛からライオンたちを追ひ払っている（水牛たちが捕食者たちを角にかける間に、子供が鉤爪かぎめから逃れる）動画に比べて、再生回数がはるかに少ないだろう。どちらの動画も印象的で興味深いのが、私たちの心の琴線に触れるのは後者だけだ。私たちは水牛の子供に自分を重ね、その鳴き声を耳にし、母親のもとに戻れたことを喜ぶ。ライオンたちにと

ってその結果は少しも喜ばしいものではなかったことなど、都合良く忘れてしまう。

これまた情動の持つ一面であり、私たちは情動のせいで、ついどちらか一方に肩入れしてしまう。私たちは情動に強い興味を抱いているだけではない。社会の構造は、私たちがたいい認める以上に情動が決めている。権力を渴望するという、全霊長類共通の特徴がなかったら、政治家はどうしてより高い地位を求めたりするだろうか？ 親子を結ぶ情動的な絆がなかったら、人はどうして家族のことを心配するだろうか？ 社会的なつながりと共感に根差した人間としての良識がなかったら、どうして私たちは奴隷制や児童労働を廃止したのか？ エイブラハム・リンカーンは奴隷制へ反対する理由を説明するにあたって、南部を通る旅で出くわした、鎖につながれた奴隷の哀れな姿にわざわざ触れている。私たちの司法制度は恨みや報復の感情を公正な刑罰へと導くし、医療制度は思いやりに元をたどれる。病院（英語で病院を表す *hospital* は、ラテン語で「手厚くもてなす」ことを意味する *hospitalitas* に由来する）は、修道女が営む宗教的な慈善事業として始まり、専門家が経営する非宗教的な施設になったのはずっとあとのことだ。実際、私たちがとりわけ大切にしている制度や努力の成果はみな、人間の情動としつかりと絡み合っており、情動抜きでは存在しないだろう。

この認識があるから、私は少し違った見地から動物の情動を眺めざるをえない。それだけをじっくり考えるべきテーマとしてではなく、私たちの存在そのものや、目的と夢、高度に組織化された社会に光を当ててくれるものとして、動物の情動を見ることになる。私は霊長類の行動が専門なので、当然ながら人間の仲間の霊長類たちにおもに注意を向けるが、それは、彼らの情動のほうが本質的に注目に値すると考えているからではない。たしかに彼らのほうが私たちに似たかたちで情動を示すが、

魚類から鳥類や昆虫類まで、情動は動物界のいたるところに存在する。タコなどの賢い軟体動物さえ情動を持っている。

私は他の種を、「他の動物」とか「人間でない動物」とはめつたに呼ばないつもりだ。事を単純にするために、たいていはただ、「動物」と呼ぶことにする。生物学者である私にとって、人間も同じ動物界の一員であることほど自明な事実はないのだが。私たちは動物だ。私は自分自身の種が情動面で他の哺乳類とたいして違わないと思っ**て**いるし、実際のところ、人間ならではの情動を特定しろと言われたら困ってしまう。だから、私たちはこの地球上でいっしょに暮らす仲間たちと共有している情動的背景に、細心の注意を払ったほうがいいだろう。